

# 企業スポーツの歴史社会学

——「東洋の魔女」を中心に——

新 雅史

本稿は、繊維工場のレクリエーションが「東洋の魔女」というナショナル・イベントに至るまでの過程を素描するなかから、工場空間に準拠していたバレーボールが企業という共同性へと接合していくありさまを明らかにする。バレーボールの準拠空間が階級性の強く残存する工場から企業共同体へと移行することによって、工場レクリエーションは企業スポーツへと変貌する。レクリエーションから切り離された企業スポーツ＝バレーボールは、学校スポーツと並ぶアマチュア・スポーツとして、ナショナルな階梯システムへと位置づけられることになる。

## 1 はじめに——問題設定と研究対象

20世紀初頭以来スポーツは、新聞メディア・音声電子メディア・映像電子メディアと、マスメディアの進展とともにその存在感を強めてゆき、かつナショナルな感情を媒介してきた。こうした経緯はスポーツがその魅力でもって、大衆へと直截的に浸透した歴史であるかのように見える。だがスポーツに多少なりとも関心あるものなら誰もが知っているように、そこではアマチュアリズム／プロフェッショナルリズム<sup>(1)</sup>という規範が近年まで強く働いていた。すなわちスポーツという文化は、マスメディアと貨幣経済の進展でもってその存在感を増していったにもかかわらず、一方で反資本の精神を強調し、その精神を承諾しない競技者は世界最大のスポーツイベント（オリンピック）に参加できないという、特異な規範を有していたのである。そして現在こうしたプロ／アマ規範は、オリンピ

ックにおけるプロ選手の解禁から見て取れるように急速に崩れてきている。

現代社会におけるプロ／アマ規範の崩壊がいかなる社会的背景をもとにして生じたかを測定するためにも、スポーツの資本主義にたいする特異な規範を歴史的に問い返すことが課題として求められる。こうした課題の延長線上から考えてみたいのは、アマチュアリズムの領域における、スポーツ空間の形成についてである。日本においてアマチュアリズムが形成されてきた場は主として学校と企業であったが<sup>(2)</sup>、先行するスポーツ研究では、その両者は非対称的な扱いを受けてきた。既存のスポーツ研究が体育学（教育系）専攻の研究者によって支えられたこともあって、その研究対象は学校スポーツに偏ってきた<sup>(3)</sup>。

ただ日本における企業スポーツ<sup>(4)</sup>の考察の相対的欠如は、単にアカデミズムの制度のみに帰責できるものではない。われわれはその要因を、スポーツの社会学的研究において基本的な参照

点として位置するヨハン・ホイジンガ (Huizinga [1938] 1956 = 1963) の考察に求めることができる。よく知られているように、ホイジンガがスポーツに言及したのは、20世紀のスポーツの流行が彼の考える遊びでないことを主張するためであった。ホイジンガは近代スポーツの特徴<sup>⑤</sup>を列挙するなかで、遊び本来の自発性、気楽さ、のびやかさが失われてしまっていることを指摘した。スポーツは「真面目になりすぎた」。真面目になりすぎると、記録や勝敗へのこだわり、国家や民族への思い入れなどが強まり、フェアプレーの理想も実現されにくくなるというのだ。ホイジンガのこうした「発見」は、しかし彼以後のスポーツの社会学的考察においてひとつの桎梏となった。それは遊びという規範との対比によってスポーツを定義したために、スポーツが遊びの疎外として論じられることになったからである。つまりホイジンガ的パースペクティブは、個別的＝歴史的説明でもってスポーツの存立機制を資本主義の内側から捉え返すという意識に欠けているため、遊びからの疎外状況を逐一告発するか、その疎外を克服する参照軸として、「真なるスポーツ」を近代以前や非西欧に求めるという懐古的行為を導くことになってしまうのである<sup>⑥</sup>。

そして日本における企業スポーツの考察<sup>⑦</sup>(もしくはその欠如)はホイジンガ的パースペクティブの限界を踏襲してしまっている。既存の研究は企業スポーツを日本独特の存在として論じてきた(間 1989: 玉木 1999 など)。そしてその現象を理論概念として暗黙裏に説明してきたのが、経営家族主義であり、企業コミュニティーという概念であった<sup>⑧</sup>。詰まるところ企業スポーツは、子弟等の縁故採用・卒業かつ就職・終身雇用・年功賃金・手厚い福利厚生などといった日本企業のコミュニティー性を現わすイン

デックスのひとつとして理解されてきたのである。だがその視座に居座りつづけるかぎり、企業スポーツは近代スポーツの存立のありようと無関係なものとして位置づけられる。この視座もやはりホイジンガとおなじく一元的な資本主義とスポーツの枠組みを採用し、企業スポーツを産業社会学の知見へと首尾よく回収してしまう構図となっている<sup>⑨</sup>。

以上の記述は次のようにまとめることができる。産業社会学の視座、つまり企業社会をひとつの共同体と仮想し、その内部の人間関係やシステムを考察するといった視座においては、企業スポーツは福利厚生か宣伝効果かの二項対立としか取り扱われてこなかった。一方で、現代スポーツ社会学の視座、労務管理や宣伝効果という概念で包摂されない、スポーツなるものの社会的意味を問うてきた視座——企業にとってのスポーツの「外部効果」を専門的にとり扱う視座——においては、スポーツする身体を形づくってきた企業という媒体への制度的関心が決定的に欠けていた。だからこそ、ふたつの立場を包含する企業スポーツという対象は本格的に取り扱われることがなかったのである。

以上の先行研究にたいする批判的見地から、本稿では、企業スポーツがいかなる歴史的条件によって創られた産物であったかを、スポーツ空間の変容過程をつぶさに記述するなかから明らかにする。具体的には、企業スポーツ一般を取り扱うのではなく、「東洋の魔女」という個別的＝歴史的対象を選択したい。「東洋の魔女」とは1964年東京五輪の女子バレーボール競技で金メダルを獲得した日本チームのニックネームのことである。「東洋の魔女」は金メダルが懸かった対ソビエト戦にて、テレビジョンという新しく登場したメディアで視聴率90%近くを稼いだ。一方で「東洋の魔女」は、「大日

本紡績株式会社貝塚工場女子バレーボールチーム」(以下、日紡貝塚)のメンバーによって固められており、「東洋の魔女」というネーミングも日紡貝塚のことを意味していた。「東洋の魔女」という現象は、一企業スポーツクラブチームが東京五輪というナショナル・イベントと節合した歴史においては特異な事例であるが、企業スポーツが日本スポーツ界を支えたという意味においては典型的な出来事だといえる。

ただし本稿では「東洋の魔女」をイベント的に取り扱うのではなく、そこに至るまでの系譜を描くことを試みる。「東洋の魔女」が成立する社会的基盤、すなわち企業という場でスポーツすることとはどういうことだったのか、労働者の集合的実践としてのスポーツとはいかなるものだったか、そしてそれがいかにしてナショナル・イベントとして結実したかを、歴史的文脈のなかから説明することに主眼を置いた。そうした歴史社会的作業を経ることによって、「企業」と「スポーツ」がいかなる社会的条件で結びつくにいたったか、その節合がスポーツなるものをいかに存立／変容せしめたかをわれわれは捉えることができるだろう。

## 2 レクリエーションから競技へ——工場空間とバレーボール

「東洋の魔女」の系譜を描くにあたって、バレーボールの成立の経緯を避けて通ることはできない。バレーボールが「発明」されたのは、1895年、アメリカのYMCA(キリスト教青年会)においてである。YMCAは、急激な産業化によって劣悪な環境下にあった青少年労働者にたいして奉仕することを目的に1845年にロンドンで産声を上げた。まもなくアメリカへと伝播したYMCAは、都市労働者にたいするレクリ

エーションを組織的に供給するなかで、身体運動を積極的に採用する。そこでみずから考案した身体運動が、バスケットボール、バレーボールというチーム・スポーツだった。これらのスポーツは冬季に体育館内——つまりはYMCAの建物のなか——でプレイ可能であることを条件に創られており、なるだけYMCA内でスポーツを実践してもらおうよう、競技性よりも参加の気軽さと娯楽性が気に掛けられた。YMCAが理想とする職場レクリエーションとは、労働者と使用者が一体となって、身体と精神の再創造へと余暇を活用することだった。チーム・スポーツをプレイすることによって、労働者と使用者が同じチームのメンバーとしてお互いを理解するようになり、共同意識を育むことになる。こうしたチーム・スポーツの効用を信じていたYMCAは、体育館を各地に設置し、体育館でプレイできる身体活動としてバスケットボールとバレーボールを「発明」した<sup>90)</sup>。(Anderson 1955 = 1965)。

バレーボールが労働者の訓育として創られたことは2つの点で重要であった。第1にその成立が労働者の訓育と関係があったため、バレーボールは競技としてより労働者のレクリエーションとして認知されていたこと。第2に、初期近代オリンピックが古代オリンピックに倣って個人スポーツを重視したこともあって、階級性が残存したチーム・スポーツたるバレーボールは1964年の東京オリンピックまで正式採用されなかったことである<sup>91)</sup>。

バレーボールが日本に伝播したのは、1908年(明治41年)のことで、YMCA留学生としてアメリカに遊学していた大森兵蔵が伝えたといわれる。バレーボールが日本で普及しはじめたのは、1913(大正2)年にF・H・ブラウンが関西のYMCAを拠点に体育プログラムを実施

してからと言われるが、20世紀初頭のバレーボールは競技としては一般へとなかなか拡がらなかった<sup>12)</sup>。

こうしたなか、YMCA出身の男性社員の指導などによって、女子バレーボールは、レクリエーションとして繊維業界の工場で盛んにおこなわれる。鐘紡の工場では1913(大正2)年に神戸商高の学生がバレーボールの指導をおこなっている。倉紡では1918(大正7)年にバレーボールの社内大会がおこなわれ、日紡では1923(大正12)年にバレーボールが導入された(『月刊 バレーボール』1951年2月号;日本バレーボール協会編1982;ニチボー株式会社1966)。他の繊維業界の会社でどの程度おこなわれていたかは資料が残されていないためわからないが、1920年あたりには、大手の繊維工場においてレクリエーションとして相当程度におこなわれていたと、先ほどしめした鐘紡、倉紡、日紡の例から想定できる。ただ、それが会社を越えたバレーボール競技としておこなわれはじめたのは、ずいぶん後のことである。1951(昭和26)年に倉紡の社長・藤田勉二は、大正期からバレーボール大会が工場内で行われていたにも関わらず、なぜ倉紡が対外的な試合で活躍しなかったかについて以下のように説明している。

和田 倉紡が古い歴史を持ちながら、対外的にはそれ程レベル上進が認められなかったのはどういう理由でしょうか。

藤田 それは倉紡が、バレーを従業員に広く奨励しようとする結果、自然、強チームの出現を制厄する形になったものと思います。……紡績会社は仕事の性質上、従業員の保健、衛生的見地から一般にスポーツを励行しておりますが、社内大会はこの趣旨から設けられたものであり、若し強チームがどこから

出れば他のチームは毎回出場しても優勝は難しいことになって、大会への関心も薄れ、惹いては自然消滅の結果に立至らぬとも限らない。それで奨励はするが、レベルの向上についてはバレーの競技的發展を望まない、という、いわばレクリエーション的普及策をとっていたわけです。どうでしょう、小山君。

小山(倉紡人事部長) 社長のおっしゃる通りです。

若林 会社としては、厚生上、レベルもB、C級にする必要があったというわけですね。(「倉紡藤田社長 大いに語る」『月刊 バレーボール』1951年2月号)

繊維業界では20世紀初頭からバレーボールが奨励されていたが、それは保健、衛生的見地からのバレーボールの励行であり、競技的發展を望んでいない「レクリエーション的普及策」であり「会社としては、厚生上、レベルもB、C級にする必要があった」。工場の外に出て競技をするのは具合が悪かったというのだ。しかし藤田社長の弁明にかかわらず、この時期のバレーボールは競争しようにも、競技としての体裁が整備されていなかった<sup>13)</sup>。労働者レクリエーションとして考案された経緯ゆえ、バレーボールは競技ルールの曖昧な身体運動として位置づけられており、それを競技したのは主として高等教育を享受する少数の学生たちであった<sup>14)</sup>。つまり戦前の繊維工場のバレーボールはその普及ぶりにもかかわらず、工場外の他者と競争する基盤を有していなかったのである。だが戦後における繊維工場的女子バレーボールは競技性へとそのシフトを急激に強めていく。

戦後における繊維工場バレーボールの競技化は大きく分けて3点ほどの要因があった。1点目は1930年(昭和5年)に成立した全国規模

での競技ルールの浸透である。チーム・スポーツは成文ルールがあつてはじめてスポーツする空間とそこに配置される人数が画定される。このルールが権威を持った競技団体とともに認知・浸透されないかぎり、チーム・スポーツが競技としてマスに普及することはありえない。2点目として競技ルールに適合したスポーツ空間が、工場の福利厚生施設として整備されたことが挙げられる。チーム・スポーツが競技として普及するには、その社会的基盤としてルールに適合した空間（屋外コートや体育館）が各地に整備される必要がある。バレーボールのルール成立・浸透にシンクロするかのごとく、戦後日本はスポーツ施設が国土にあまねく配備されることになる。戦後すぐの1948年に社会教育法が施行されたが、この法律は「青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動」たるスポーツ・レクリエーション活動を社会教育に含んだものだった。そのうえでこの法律は、社会教育施設の設置にたいする国・自治体の努力義務と、国の財政援助を明記した。その結果、スポーツ・レクリエーション施設が各地に整備されはじめる。文部省は各会社工場にたいしても、「社会体育指導要綱」にもとづいて職場体育の振興を迫った<sup>14</sup>。規格化されたスポーツ空間の増殖は人びとにルールを認知させると同時に、同一の条件のもとでの競争をあらゆる国土で可能にする。3点目に新聞メディアによる実業団大会の整備を指摘できる。1918年（大正7年）に大阪朝日新聞社・広島通信部主催の女子排球（バレーボール）大会がおこなわれているが、それはルールの未整備もあつてローカルかつ単発的なものであった。しかし総力戦期の厚生運動とそれに付随した明治神宮競技大会の実業団カテゴリーの創設<sup>15</sup>を経て、戦後すぐの1946年（昭和21年）には朝日新聞後援で全日本排球

東西対抗試合が開催。48年には毎日新聞主催で全日本実業団男女東西対抗戦も開催され、朝日新聞主催の全国健康保険組合女子バレーボール大会、全日本労働組合体育大会と雨後の筍のごとく大会が整備される。日本バレーボール協会も戦後のレクリエーションブームに便乗しつつ「100万人のバレー」のキャッチフレーズのもと普及運動をすすめてゆく（日本バレーボール協会編1982；小泉1991）。

以上の要因の絡み合いによって急激に進行していくバレーボールの競技化は、鐘紡においては一事業所のみで36ものチームを産出せしめ、結果、社内外問わず何らかの大会に出場する女子工員は全従業員の2割を占めたという<sup>16</sup>。寮対抗、事業所対抗、部署対抗といった大会を開くからには、当然ながら工場内にバレーボール施設を整備せねばならない。こうした工場におけるスポーツ空間の増殖は、平準化された身体を育てるという初期の目的にちよつとも、工場空間の外へとはみ出る身体を各工場で準備することになろう。それは工場代表チームの増加とそれにとまなう競技化された身体増加である。その変容は新聞メディアの大会整備と接合し、昭和29年度の全日本総合女子選手権で50チーム中、「鐘紡6、日紡5、倉紡4、東レ3、東洋紡2」と繊維工場の独占と結実する。

それにしてもこの繊維工場の独占は少々「異常」である。各地に散らばっている工場から全国大会に行くためには、旅費・宿泊費・休暇手当など、さまざまな経費を要する。当時のバレーボールは最低でも9人を要するチーム・スポーツだった。これだけバレーボールが盛んになるには、女子労働者の多さ、労務管理などといった以外の理由が隠されているのかもしれない。次の座談会からは、バレーボールの競技性ゆえに、工場内である共同性を獲得していく

様子がわかる。

清水 私がバレーをやり始めた頃は……バレーの部対抗でビリから二番——それが癩で癩でたまらないものだから、ようし、なら俺がやったろう、と……社内対抗に負けまいと努力した甲斐があって京都で開かれた近畿大会の準優勝に勝ち残ることが出来て、当時強かった某高女との優勝戦になったんだが、よく喰い下がってリードしていたところ『女工に負けたら恥じよ』という声援が、女学校側からかゝった。それを聞いてうちの選手はカーっとなってしまって、今まで調子よくいっていたのがシドロモドロになって負けてしまったんだよ。試合が終ってうちの選手達は、女工といわれたのが口惜しいといって皆オイ、泣くんだ。私も選手同様、あんな負け方をした口惜しさから、会社はクビになる覚悟で、ボールが見えなくなる頃まで、丸一年間、練習に明け暮れして迎えたのが翌年の同じ大会。……試合は予想通りうちが勝ったが、試合が終ってからうちの主将が、その女学校が負けて泣いている方向へ歩いて行く。何しに行ったのかと思って後で聞いてみた所、『女工に負けて口惜しいか』と云ったというんだ——(笑)——とに角、日本中に女工の腕前を見せてやろうと思ったのが、バレーをやり始めた最初なんだよ(笑)……

(「女子バレーボールの指導法(下)」(『月刊 バレーボール』1950年12月号)

ここでは、レクリエーションとしておこなわれていたバレーボールが、「女工」という共同性を背負いつつ、その競技性を強めていく様子が見て取れる。繊維業界のバレーボール関係者は決まってこういう。「社内の厚生大会へ出て

もコロリと負ける」「ビリから二番」——これらが「癩で癩でたまらないものだから」、必死で練習したのが高じた結果、バレーボールに深入りするようになったと。各々の工場内でバレーボールに熱中した結果、対外試合に多くの繊維会社が出場するようになり、そのことで新たな地平での競争がはじまる。戦後のバレーボールが共通のルールにもとづいておこなわれる競争へと変転したことで、それは普段隠れている不平等・差異・葛藤を露にする効果をもった。たとえば、一般の競技大会に参加することで、繊維工場チームは「女工に負けたら恥じよ」というヤジを女学生から受け、「女工」という負の烙印を押される。だが逆に、それが発憤の材料となって、「ボールが見えなくなるまで」バレーボールに取り組む。そうして努力した結果、「女工」たちはヤジを飛ばした女学生に勝利し、「女工に負けて口惜しいか」という捨て台詞を学生に向かって吐くにいたる。ここまでくると、バレーボールは「日本中に女工の腕前をみせるものへと化している。

ただここで注意したいのは、「女工」という侮蔑の匂いを感じる用語が使用されているからといって、当時の繊維工場が「女工哀史」で見られるような悲惨な労働環境であったと早合点してはならないことだ。戦前問題となったような人身売買同然の就業、ならびに常軌を逸した長時間労働は、戦後の繊維業界(とくに大手)において払拭されている。人びとの意識のなかに、繊維工場の若年女子工員の境遇にたいする危惧があったにせよ、それを戦後の繊維業界に適応するのは誤っているし、危険である。社会学者である石田浩と村尾祐美子(2000)を参照するならば、戦後まもなくの繊維業界における労働環境の特徴は、①女性中卒就業者の大量供給先②住居移転率の高さ③女子就業者の勤続年

数の短さ、の3点にまとめられる。すなわち戦後における繊維工場は、「女工哀史」で描かれる労働環境というよりは、農村から都会へと集団で就職し、その後行方もしれず都会で個々バラバラな人生を辿るという若年労働者の孤独さを象徴していた。この問題は、繊維業界の各企業に対して絶え間ない努力を要請することになる。安全な労働環境を整備すること、福利厚生充実を図ることで前近代的というイメージを払拭すること、会社への帰属意識を高めることで定着率を上げること、などである。こうした要請に応えるにあたり、バレーボールの存在は非常に重要であった。バレーボールをプレイすることは、身体の健全化という点だけでなく、チーム・スポーツの特徴である協同・共同性を担保できた。それだけでない。筆者がおこなったインタビュー<sup>10</sup>によれば、無名な工場ではなく、あの「ユニチカ（日紡）で働いていること」に若年女子労働者はプライドを感じていたという。つまり戦後の繊維工場は、女子工員の身体を健全化する福利厚生施設を整備したうえで、その施設を利用するバレーボール部を活躍させることによって、女子工員たちの共同意識の高まりとスムーズなリクルート活動を期待したのである。

以上のように、バレーボールのルール整備とそこから派生する全国大会の増加は、工場チームと学生チームの対決を増すことになる。国家の隅々へと行きわたるルール整備とスポーツ空間の増殖は繊維業界の思惑と節合し、バレーボール大会は繊維業界の独占場となる。しかしそうしたバレーボールの専門化を可能にしたのは、繊維工場におけるバレーボールがレクリエーションの側面を強く持っていたからこそである。つまり、寄宿舎チーム、部署チームなどといったさまざまな括りでのチーム編成の延長線上に、

繊維工場単位のチームは存在したのである。戦後初頭の繊維工場における女子バレーボールは、女子工員の身体を健全化する（レクリエーションの）バレーボールと、女子工員の共同性を担保する（競技の）バレーボールのふたつが絡み合って発展していった。その結果、全国大会で「鐘紡6、日紡5、倉紡4、東レ3、東洋紡2」という出場数にまで至ったのである。

### 3 繊維工場のバレーボールから企業のバレーボールへ

繊維業界におけるバレーボールの競争激化は、工場単位のチーム編成から企業単位のそれへと変化をもたらす。その変化をもたらした社会的背景を2つ挙げておこう。第1に、前節で見たように繊維業界間での競争が激しくなり、工場単位での選手育成では勝つことが困難になったこと。第2に、朝鮮戦争特需以降の従業員の減少と相次ぐ工場の閉鎖である。いち早くこの変化を遂げたのが、大日本紡績であり、その変革の結果生まれたチームが日紡貝塚であった。会社統一チームの装いとなった日紡貝塚は、結成翌年の1955（昭和30）年に、早くも全日本女子総合選手権で優勝。1957（昭和32）年には、女子バレーボール4大タイトル中3タイトルを獲得する。

日紡貝塚という統一チームの破竹の勢いは、回転レシーブを考案した大松博文<sup>11</sup>という稀代の監督の指導によるところが大きかったが、その背景には会社からの全面的なバックアップがあった。バレーボール部の強さは会社の強弱を計るバロメーターだから、日紡貝塚女子バレーボール部はなにがあっても勝ちつづければならない。大日本紡績の社長であった原吉平は、そう大松監督を叱咤激励したという。この大日本

紡績の方針は、以前の女子バレーボールのありようと根本から異なったものだった。これまでの女子バレーボールは工場内レクリエーションの延長上にあった。だからこそ、「鐘紡6、日紡5、倉紡4、東レ3、東洋紡2」もの工場チームが、全国大会まで勝ち残ったのだった。だが、日紡貝塚という単独チームの結成は、女子工員たちのレクリエーションと切り離して成立したものだ。つまり、女子バレーボール部は是が非でも勝たなければならないもの、それは会社の面子に関わるものとして、各工場のレクリエーションとバレーボール部を完全に切断し、バレーボールのやる意味を根本から変えた。貝塚工場は会社の庇護のもと、各工場のバレーボール部から有望選手がかき集められ、工員用の大食堂を体育館に改築する（昭和32年6月）など、昼夜問わず練習に励むことのできる環境へ整えられていく。

会社からの全面的なバックアップのなか、日紡貝塚は最強の女子バレーボールチームになった。だが、このチームを国内の一強豪チームから、唯一無比の存在にしたきっかけは、東京五輪の開催だった。東京五輪開催にともなう選手強化のための海外遠征で日紡貝塚は海外のナショナルチームに連戦連勝し、その伝説は始まった。日紡貝塚は五輪強化のための海外遠征に6人制単独チームで参加する。インドネシア遠征、ブラジル世界選手権の遠征とつづき、1961（昭和36）年のヨーロッパ遠征では24戦全勝。この遠征で日紡貝塚は世界選手権3連覇中のソ連を破り、海外メディアから「東洋の魔女」と命名される<sup>20</sup>。東京五輪を控えた国内のメディア産業は、この卓出したネーミングの商品価値を見出し、五輪の価値を高める“呪文”として大いに活用した。

「東洋の魔女」が巨大なメディア商品と化す

ことは、大日本紡績も予期していない出来事だった。というのも、日紡貝塚の海外単独遠征を支えていたのは、東京五輪での女子正式競技化をねらう日本バレーボール協会の思惑だったからだ。つまり日本バレーボール協会は、国内随一の日紡貝塚を海外に派遣することで、東京五輪での女子バレーボール正式競技化に先鞭をつけたかった<sup>20</sup>。思いもしなかった“ヒット商品”となった日紡貝塚を、大日本紡績は徹底的に利用した。ここでは典型的な事例を2点挙げておこう。第1点は、東京五輪以前に、大日本紡績が日紡貝塚を描いた映画を2本も製作していることである。そのうちの1本（『挑戦』渋谷昶子監督）は、カンヌ映画祭で短編映画部門のグランプリを獲得している。2点目は、東京五輪前に日紡貝塚は休日に全国各地で公開練習なるものをおこなっていることである。

こうして「東洋の魔女」は絶大なるスペクタクルとなった。その頂点が東京五輪だった。東京五輪は、テレビジョンの世帯普及率が90%を越えるなか、NHKと民放全局が同じ映像を使用して、全国に向けて中継をおこなうという、これ以上ない「ナショナル／メディア・イベント」であった。そのフィナーレが「東洋の魔女」であり、そのポジションに相応しく「東洋の魔女」の決勝戦は90%を超える視聴率となったのである。

#### 4 繊維工場と「東洋の魔女」

「東洋の魔女」というナショナル・イベントと結びついたバレーボールは、工場空間に準拠したレクリエーションから、工場空間から相対的に自立・自律的な企業スポーツとして成立していく。ただここで注意したいのは、「東洋の魔女」が一足飛びに工場空間から遊離した企業



空間へと離陸したかといえばそうとは言えない点である。大松監督がおこなう日々のトレーニングのハードさはよく知られているが、何がハードかといえば、まずもってその練習時間の長さであった。そしてその練習時間の長さは、「東洋の魔女」たちが工場空間から脱皮していないゆえであった。「東洋の魔女」たちは、全国の工場からバレーボールのために集められたが、彼女たちは女子工員としての立場を降りたわけではなかった。いくら夜遅くまで練習が長引こうとも、いくら彼女たちが有名になろうとも、大松は朝8時から夕方3時半までの勤務を止めさせなかった。日紡の選手たちによれば、勤務後から夜12時ごろまで練習をつづけ、就寝するのはたいてい2時ごろだったという<sup>24</sup>。むろん、大松も選手と同じように貝塚工場・用度課長として、朝8時から勤務していた。大松曰く、睡眠不足になってまで練習するのは当然だった。アマチュアなのだから、仕事の余暇にスポーツをやるのは当たり前であり、仕事のあとに人並み以上に練習しなければ世界一にはなれない、という理屈だった。「ソ連の選手たちはすべてプロなの」だから、「なおかつ彼らに打ち勝つ力をつけるためには」練習時間の長さが必要だったのだ<sup>25</sup>（大松 1963: 52-3）。

選手たちを女子工員と同等に扱ったのは、勤務時間だけではない。彼は選手たちに寄宿舎生活を一般の女子工員とともに送らせた。

清水 ……他の社員との関係で心配されるとかそういう点はないでしょうか。

大松 現在、1つの部屋に3人ないし4人おられますが、そこに1人ずつぼこぼこ入れてあるわけです。そうしますと選手はうちの部屋のスターだということで、その部屋の人が常々も応援してくれるわけです。……夜なん

か部屋に帰るのが12時すぎますが、ふとんだけはちゃんと敷いてくれているのですね。……また現場で仕事をしている男の工務係は自分の使っている女の社員を集めまして“バレーはあれだけやっているのではないか、仕事の終わったあとで夜の11時半、12時まで練習しているのではないか。あなたたちもああいう気持ちでやってくれたら、もっと製品もよくなり生産も上がるのだ、だからそういう気持ちでやってほしい”ということをいうわけですね。……それが本当の職場スポーツだと思いますね。

「優勝記念特別放談」（『バレーボール・マガジン』1963年1月）

大松は、一般の女子工員が住む寄宿舎の部屋に、選手を1人ずつ入れることによって、一般女子工員とバレーボール部とのあいだの一体感を作り出そうとした。そして、それは一般女子工員とバレーボール部のあいだの垣根を埋めるだけを意味しなかった。バレーボール部の生活実態を身近なものにすることで、工場の生産性さえもがアップした。それこそが「本当の職場スポーツ」である、そう大松は自慢気に言うのだった。大松のあとを受けて日紡貝塚監督となった小島孝治氏<sup>26</sup>に、バレー部員を一般の女子工員の部屋に入れる慣行を大松のあともつづけたのか聞いたところ、次のような答えが返ってきた。

ぼくも〔女子バレーボール部員を〕一般工員と一緒に入れました。ぼくはそれがなぜ良いかといえばね、……部屋のなかへ「バレー部の選手よろしくお願いします」って行くでしょ？ その部屋の寮生に嫌われたら、バレー部の選手のなかへ入っても、うまくいかんね。

……「となりにごみが落ちていたら、ごみをひらうように、掃除するように」とか寮生の上級生が選手たちに教えてくれるわけ。……人間関係の指導は、ぼくは寮生がやってくれと思ったもんね。だからこれはええと思って、その〔一般工員と部員を同じ部屋に入れるという大松の方針〕とおりに、絶対これはやるべきや、と思ってやりましたよ。(□内は引用者)

小島氏にとって寄宿舎は、バレーボールというチーム・スポーツにおいてもっとも基本を為す人間関係を叩き込んでくれる空間だった。そこでは寄宿舎の部屋それ自体が一つのチームとして捉えられていた。かつ小島氏は、筆者が工場内での一般女子工員とバレーボール部員の関係について問い直したところ、次のように述べた。

……工場をあげての応援というのは、口だけじゃないんですよ。……〔昼の〕12時にサイレンが鳴って、12時45分までに食事して、職場へ帰るといふ〔規則だった〕。ならね、10分ぐらいでご飯食べてね、あとの30分はバレーの体育館へ見にくるわけですよ。だいたい150人ぐらい。毎日。食事が終わったら、だーっと体育館へ入ってきて、自分の部屋における〔選手を〕補欠であろうがレギュラーであろうが、自分のいわゆる…兄弟みたいに思ってくれてるわけやね。そうなったら、〔そう思われた選手は〕もう一人前ですわ。「小島先生、うちのね、あの一年生の補欠を、なんであの子だけ鍛えるんや、なんで絞るんや。あれはうちの部屋の子やから大事にしてください」そんなん言うてくるわけやね。(□内は引用者)

小島氏への聞き取り調査を参考にしているならば、大松の方針は「東洋の魔女」を「選手」としてのみでなく、彼女たちを「選手」と「女工」のあいだに位置づけることによって、会社・工場との一体感を生み出し、企業がスポーツに投資する意味を作り出すことだった。この工場空間を利用した戦略は、選手たちが有名になればなるほど、その距離の短さゆえ、女子バレーボール部員を一般女子工員の模範として位置づけることが可能となる。

しかし同時に、「東洋の魔女」たちと一般の女子工員とのあいだには埋めるのが容易でない差異が存在した。それは学歴という差異である。「東洋の魔女」たちのほとんどは、高校時代に活躍したプレイヤーであった。工場レクリエーションから離れつつあった企業のバレーボールは、高卒の選手をスカウティング活動によって集めるに至っていた<sup>89</sup>。中卒がほとんどの繊維工場<sup>90</sup>のなかで高卒出身であることは、「魔女」たちの学歴への意識を高めたといつてよい。学歴にかんするひとつのエピソードを挙げておこう。大松博文が昭和33年に千葉の中学から日紡貝塚に連れてきた磯辺サタという有望なアタッカーがいた。日紡貝塚に来て間もなく、磯辺サタは大松博文にこう懇願したという。「先生、なんとか、高校へ行かせてもらえないだろうか。わたしは月々貯金している。……夜学でもいいから、高校へ行かせてくれ」と(大松1964:181)。なぜ磯辺サタが懇願したかといえば、大松曰く、選手の大半が高卒のため、端々に「高校」という単語が出て、そのたびに彼女がうれしい気持ちになったからだという。

選手たちは、中学からきた従業員がほとんどの工場のことだから、いばるのではなく、

高校を出ているのだから、それにふさわしい  
拳措をしなければならぬように思う。年下  
の選手になにか注意するにも、「あんたたち  
は高校を出ているのだから。」という。いわ  
れる中の磯辺サタひとは、中学しか出てい  
ない。(大松 1964: 181)

結果、磯辺サタは大松の配慮によって、小島  
孝治氏が当時勤務していた大阪・四天王寺高校  
に入学した。この例でわかることは、「東洋の  
魔女」たちは、中卒の「女工」と自己とを区別  
していたことである。「東洋の魔女」たちの工  
場内での「卓越化」を隠蔽し、工場(=「女工」  
たち)のコミュニティーをいかに維持していく  
か。大松による寄宿舍での一般女子工員との共  
同生活は、そうした難問を回避する大松の巧み  
な「戦略」のひとつとして捉えることができる。  
「東洋の魔女」たちは、以上のようにして、大  
松の指揮のもと「選手」と「女工」というふた  
つの役割を往還しながら、工場の共同性をいか  
に確保するかという問題と、オリンピックにお  
けるスペクタクルとのせめぎあいを生き抜いた  
のである。

## 5 まとめ

ここまでの記述を敷衍するならば、「東洋の  
魔女」とは、工場レクリエーションから出発し  
たバレーボールを企業スポーツへと決定的に離  
陸せしめた出来事であったと整理することがで  
きるだろう。

当初、工場空間のバレーボールは階級的身体  
の改善という要請のもと、ローカルなルール  
のもとにプレイされていた。だが統一ルールの普  
及と社会教育の国家的要請にともなって、各工  
場に統一規格のスポーツ空間が配備される。そ

のスポーツ施設は女子工員の身体を健全化する  
目的で作られたものの、一方で工場からはみ出  
て競争する身体(工場代表チーム)を産み出して  
しまう。ただそうした工場チームも、各工場が  
工場レクリエーションの延長線上から同列に参  
入しているうちは、「女工」という階級的アイ  
デンティティを担保できた。しかし工場代表チ  
ームが企業代表チームと読み替えられること  
によって、そうした階級という共同性は徐々に失  
われることになる。その流れを決定的にしたの  
が日紡貝塚であった。工場から遊離しつつあ  
ったバレーボールは、テレビの大衆的普及、日本  
初のオリンピック、バレーボールの正式競技化、  
などいくつかの条件が相俟って、「東洋の魔女」  
というたぐいまれなスペクタクルを持つに至る。  
そしてそのスペクタクルが供給したのは「工場  
=階級」の共同性ではなく、「企業」と「国家」  
の共同性であった。ただ日紡貝塚の監督である  
大松博文は繊維工場内でのレクリエーションと  
のバランスを図るため、工場空間からはみ出し  
てしまう選手たちの卓越化を押しとどめようと  
した。そしてそれは企業に対する帰属意識が低  
いとされた「女工」たちに、「プライド」を持  
たせるに役立ったとも見なされた。

だが日紡貝塚が奇跡的に産み出したスペクタ  
クルとレクリエーションとの幸福な結婚は、終  
焉への道を辿らざるをえないだろう。繊維工場  
にとってのバレーボールは工場空間に限定され  
たレクリエーションであり、本来、学生と競争  
するたぐいのスポーツではなかった。しかし東  
京五輪を経て国民の期待を背負うスポーツとな  
ったバレーボールは、メダルという最終目標に  
向かって学生と企業従業員が同一平面であら  
そう国民の競技となる。企業は国内の競争に打ち  
克つため、選手のリクルートと練習環境に資金  
を投入することになる。そこでは工場労働者の

レクリエーションとは無関係な競技性が求められることとなり、スポーツの準拠空間も本格的に工場から企業へと移行する。企業のバレーボールはもはや「女工」を代表するものではなく、「国家」の代表メンバーを養成する下部機関として読み替えられる。つまり企業スポーツは学生スポーツとならぶ同・じ・ア・マ・チ・ュ・アとして、オリンピックを頂点としたナショナルな階梯システムへと参入せざるをえなくなる。「東洋の魔女」以後のバレーボールは、階級性と工場という独特のトポスから切り離され、過度に競技化されたルール（6人制バレーボール）のもとで「企業」と「国家」の共同性と節合する。一方で9人制バレーボールというレクリエーション的ルールのもとで「ママさんバレーボール」がジェンダー化されたスポーツとして存在してゆく<sup>切</sup>。

階級という記号性が消えた工場のバレーボールは、効率の良い練習を求めて、工場空間から遊離していき、一般従業員とスポーツ選手たちとのあいだの距離感を強めるだろう。企業は、一般従業員から遊離した選手の身体へと投資する意味を、企業共同意識の高揚という機能に求めるだろうが、それはもはや工場空間と労働者の身体に準じたものではないため、その正当化をメディアの露出という「宣伝効果」に求めざるをえなくなる。メディア資本に頼らざるをえない企業は、しかしアマチュアリズム規範を固守することで、選手を従業員として位置づけようとはするだろう。だが、過度に競技化された選手たちの身体がメディア資本と無関係でいられるべくもない。大松博文が必死にバランスを取ろうとしたレクリエーションと競技とのあいだのバランスは、徐々に崩壊への途を辿ることになるのである。

注

- (1) この両者を分割するのは、当該スポーツイベントに参加する選手がスポーツを生業としているか否かである。
- (2) 旧ソビエト・東欧のように、ステート・アマも考えられる。
- (3) そもそも近年までスポーツ社会学は体育社会学という名で包摂されていた。スポーツ社会学会の成立が1991年3月であることからわかるように、この分野は主として体育学者によって占められてきた。
- (4) 左近充輝一（2000）によれば、「企業スポーツ」という用語は、近年使われはじめたものだという。それ以前は「社会人スポーツ」「実業団スポーツ」という呼び名が大半を占めていた。本稿でいう企業スポーツを暫定的に定義するなら、①スポーツ活動を本業としていない企業が活動主体であり、②スポーツ活動の担い手の身分が当該企業の正規従業員、のことを意味する。
- (5) ホイジンは、スポーツの規則の厳格化・細分化、記録至上主義、スポーツの組織化、トレーニングの強化と管理、プロとアマチュアの分離、などを挙げている。
- (6) ホイジンガの問題点を、著名なスポーツ社会学者であるアレン・グットマン（Guttman 1978 = 1981）も共有している。グットマンは、パーソンズとウェーバーからの影響を認めつつ、近代スポーツの特質を7つ挙げたこと（①世俗化②競争における機会と条件の平等③役割の専門化④合理化⑤官僚化⑥数量化⑦記録万能主義）で知られる。しかしそこではホイジンガと同様にスタティックな認識枠でもってスポーツの合理化・官僚化が強調されるばかりで、スポーツがいかなるメカニズムで大衆的活動となったかという、根底的な問題が抜け落ちてしまっている。よって、ホイジンガ

的アプローチの陥穽は、単に遊戯論者だけに求められるものではない。

- (7) 企業スポーツについてのまとまった研究として大崎企業スポーツ財団による一連の報告書が存在する。同財団によれば、企業スポーツは企業内同好会とプロスポーツの中間段階として定義されるが、しかしながらその図式は歴史的な考察を踏まえたものでなく、経営家族主義を経て新たな段階へと日本資本主義が進んでいるという発展段階論的な認識枠が透けて見えてしまっている。(大崎企業スポーツ財団 1997a, 1997b, 1997c, 1997d, 1998, 1999; 大崎企業スポーツ事業研究助成財団編 1999)
- (8) 経営家族主義と企業コミュニティ、それぞれの概念についての検討は、稲上 (1999) が詳しく論じている。
- (9) 同様の構図を、われわれはスポーツとナショナリズムの研究についても見出すことができる。この看過すべからざる問題系は、概して「日本ファシズム期」という限定された時期に偏ってきた(入江 1986, 1992; 坂上 1998, 2001)。これらの研究は、どのようにスポーツがナショナルなメディアとして機能したか、について詳細に記述されてはいても、なぜスポーツがナショナルなメディアとして機能してしまうのか、といったスポーツの社会的存立への問いが欠落してしまっている。このロジックはホイジンガ的パースペクティブと同様に、二重に問題である。第1に、あたかもナショナリズムとは無縁の「無垢なスポーツ」があるかのような錯覚を内部に抱え込まざるをえないこと。第2に、このような錯覚を梃子にして、スポーツがナショナリズムによって支えられているというロジックに正当性を与えていることである。そこでわれわれが取るべき重要な構えは、吉見俊哉が指摘するように、「統制=動員する国家と統制=動員される大衆、その手段としてのスポーツという

三項的な図式から解放され」ることであるが(吉見 1999: 43)、それはナショナリズムとスポーツの複雑な関係性を解きほぐすためだけに必要なものではなく、スポーツを社会学的に考察しようとするものにとって必須の手続きだといえる。

- (10) ちなみにバレーボールは、女性も気軽に参加ができるスポーツとなるよう、身体的接触がなく、ボール1つあればできるスポーツとして創り出された。
- (11) 第1回オリンピックが開かれたのは1896年であるが、その際はチーム・スポーツがひとつも含まれていなかった。そもそも初期近代オリンピックは国家のイベントではなく都市のイベントとして成立しており、選手たちも国家の代表として参加していなかった。しかし、第4回ロンドン大会(1908年)の開催から、参加申し込みを各国オリンピック委員会(=NOC)を通じておこなうことになって、開会式や表彰式でも国旗を使うようになって、参加者、参加国は急激に増える。チーム・スポーツの採用が本格的に増えるのは、国旗・入場行進・国家斉唱がオリンピックに採用されてから後のことである。
- (12) 普及していなかった原因として、①当時のバレーボールが16人制だったため、ゲーム中に1度もボールにさわることない選手が出るなど、プレイ自体の面白みに欠けていたこと、②身体的な接触もなく、レクリエーションのスポーツだと思われていたこと、があげられる。(日本バレーボール協会五十年史編集委員会編 1982)
- (13) 当初16人制であったルールも、12人制を経て、1930年(昭和5年)に日本独自の統一ルール(9人制)が作成される。ルール整備に手間取ったこととレクリエーション色の強さゆえ、戦前は「場所さえあればどこでもできるという通念から、一般にコート<sup>の</sup>施工について十分な配慮がな<sup>ら</sup>」されておらず、陸上競技場のトラックの一部や、テニ

スコート、土俵に板を張って競技がおこなわれるなどした（日本バレーボール協会編 1982: 377）。その状況は戦後になって急激に改善されるも、文芸評論家の奥野健男によれば、戦後のある時期までバレーボールは（とくに工場空間において）やはり競技というよりもレクリエーションであった。「バレーボールは貧乏人のスポーツである。工場のスポーツであり、昼休みの屋上のスポーツである。それは恵まれた大学生がやる、派手ではなやかなスポーツではない。大松博文が日紡貝塚工場の女子バレー部の監督になった昭和 28 年頃、ぼくはある生産会社の工場に勤めていた。その工場の昼休みの唯一のいこい、スポーツは、バレーボールである。いや、バレーボールとも言えないであろう。十人、十五人の男女の従業員が円陣をつくって、ボールの打ち合いをする。ボールひとつさえあればできるもっとも安い運動、キャッチボールする空地さえもない狭い場所でもやれる運動、バレーボールは戦後の貧乏な日本のあらゆる工場やオフィスで工具たちを、BG たちを慰める、ささやかにもかなしい唯一のスポーツだった。……つまりバレーボールは金にケチな企業体が奨励するスポーツである。工場の、労働者の、BG の身近なスポーツであり、日紡貝塚工場チームはそういう日本のバレーボールのあり方の象徴であり、ピラミッドの頂点なのだ。」（奥野 1964: 118）

- (14) 1940 年（昭和 15 年）の第 11 回明治神宮競技大会から、女子一般の部が「産業従業員チーム」と「女子一般チーム」とに分けられ、各グループの 1 位同士で優勝戦をおこなう方式に変更されたが、それでもこの時期の排球参加チーム数は、——男子一般の部 41、女子一般の部 15、女子従業員の部 19、男子中等の部 40、女子中等の部 49——と女子従業員の部は他のカテゴリーとくらべて少ない（日本バレーボール協会 1982）。
- (15) スポーツ空間がいかなる経緯で国土空間——む

ろんそこには工場空間もふくまれる——へと配備されるにいったかという問いは、本論文では明らかにすることができなかった。スポーツ施設の社会史的考察については、別の機会へとゆだねることにしたい。

- (16) 注 14 で触れたように、「産業従業員」というカテゴリーができたのは 1940 年の第 11 回明治神宮競技大会においてである。「産業従業員」なるカテゴリーが成立した要因としてここでは次の 3 点から考える必要があるだろう。第 1 に 1940 年の第 11 回大会が「皇紀 2600 年奉祝大会」のためその規模が前年の約 2 倍に拡大され国家的スポーツ・イベントの規模が飛躍的に増したこと、第 2 に厚生運動の影響によって産業労働者にたいする配慮が高まっていたこと、第 3 にバレーボールがレクリエーションに適したスポーツとして、産業従業員に推奨されていたこと、である。これらの複合的要因の絡み合いにより、一般女子排球の部に「産業従業員」というカテゴリーが新しく設けられたと考えられるが、この厄介な問題にかんしては稿を改めて論じる必要があるように思われる。
- (17) 「実業団座談会 盛んな社内対抗バレー——鐘紡では全従業員の 2 割——」『月刊 バレーボール』1955 年 2 月号
- (18) 大松博文監督のあとを受けて日紡（ユニチカ）女子バレーボール監督となった小島孝治氏にたいするインタビュー。小島孝治氏は 1953 年に関西大学を卒業後、大阪・四天王寺高校のバレーボール部監督に就任。東京五輪に教え子を 4 人送り込む。1965 年に日紡貝塚監督。ミュンヘン五輪・モスクワ五輪時の日本チーム監督。
- (19) 大松博文は 1921 年生。関学高商（現、関西学院大学）時代に全日本総合で 2 度優勝。卒業後ニチボーに入社し、1954 年貝塚工場のニチボー統一バレーボール部監督に就任した。68 年参議院全国区から立候補し当選、1 期 6 年を務める。1978 年

- に死去。
- (20) 海外メディアがいかなる経緯で「東洋の魔女」と名づけたか、そして国内メディアがそれをいかに引用したかは非常に重要な問題であるが、この問題については稿を改めて論じたいと考えている。
- (21) 前節で触れたように、バレーボールは東京五輪まで競技採用されていなかった。当初、バレーボールは男子の実施となる予定だったが、日紡貝塚の活躍に日本のスポーツ業界は総力を挙げて女子バレーボールが正式競技となるようにIOCへと働きかけた。この経緯は国民もマスコミ報道によって認知していた。文芸評論家の奥野健男も五輪後のエッセーでこう論じている。「この日本女子バレーボールは、ほかのオリンピック選手と違うのだ。ほかの選手たちはオリンピックにその種目があるから参加したのだが、女子バレーボールは、逆に日紡というチームが日本にあるため、オリンピックに加えられた。主催国日本に金メダルを与えるため、IOCからの引出物として特別に加えられた種目なのだ。その時から日本の女子バレーボールは、金メダルをとらなければならぬ宿命を負わされた。ほかの選手のように参加すれば意義があるとか、銀や銅をとれば大出来だというのは違うのである」(奥野 1964: 117)
- (22) 「日紡の二軍選手大いに語る」『月刊 バレーボール』1963年8月号
- (23) 大松はソ連の選手を「プロ」と見なしているが、それは仕事を持たずスポーツだけに専念できる人びとのことを意味していると考えられる。
- (24) 小島孝治氏の履歴については注18を参照のこと。
- (25) いつごろからスカウティングがおこなわれるようになったかは、筆者の能力不足で明らかにしえなかった。
- (26) 繊維産業の女性の中卒採用率は、1952年に94.5%、1967年においても82.0%と非常に高い比率であった(石田・村尾 2000: 161)。
- (27) 「東洋の魔女」以降、工場レクリエーションから競技スポーツへと完全に脱皮したバレーボールは、階級性から遠く離れたジェンダー的スポーツとして読みかえられることになる。その典型が「東洋の魔女」以後、ローカルな場で立ち上がっていく「ママさんバレーボール」である。「東洋の魔女」たちは引退して「主婦」へと旅立った後、「ママさんバレーボール」を普及させるため、全国各地を飛び回る。大松監督も日紡を退社後、参議院議員を経て、「ママさんバレーボール」の普及とイトヨーカドーのバレーボール創部に関わる。バレーボールはもはや「労働者のスポーツ」ではなく、「主婦」という消費の主体と結び付けられる。むしろそれが可能になったのも、全国各地の小中学校に体育館というインフラが整備され、「母親=主婦」としてそれを活用できたからこそである。ただ本稿では「主婦」という記号性とバレーボールが結び付けられるに至ったその詳細なコンテキストを紙幅の関係から明らかにできなかった。この点にかんしては別稿を期したいと思う。

## 文献

- Anderson, Jackson M., 1955, *Industrial recreation*, New York: McGraw-Hill Book Company, Inc. (=江橋慎四郎訳, 1965 『企業とレクリエーション』ベースボール・マガジン社.)
- 大松博文, 1963, 『おれについてこい! —わたしの勝負根性』講談社.
- , 1964, 『なせば成る! —続・おれについてこい』講談社.

- 大松博文ほか, 1963, 『“東洋の魔女”の五年間』自由国民社.
- Guttman, Allen, 1978, *From Ritual to Record: The Nature of Modern Sport*, New York: Columbia University Press. (=清水哲男訳, 1981『スポーツと現代アメリカ』TBSブリタニカ.)
- 稲上毅, 1999, 「総論 日本の産業社会と労働」稲上毅・川喜多喬編『講座社会学6 労働』東京大学出版会, 1-31.
- 間宏, 1989, 『経営社会学——現代企業の理解のために』有斐閣.
- Huizinga, Johan, [1938] 1956, *Homo Ludens, Vom Ursprung der Kultur im Spiel*, Hamburg: Rowohlt Verlag. (=高橋英夫訳, 1963『ホモ・ルーデンス』中央公論社.)
- 入江克己, 1986, 『日本ファシズム下の体育思想』不味堂出版.
- , 1992, 『昭和スポーツ史論——明治神宮競技大会と国民精神総動員運動』不味堂出版.
- 石田浩・村尾祐美子, 2000, 「女子中卒労働市場の制度化」荻谷剛彦・菅山真次・石田浩編『学校・職安・労働市場』東京大学出版会, 155-192.
- 小泉志津男, 1991, 『日本バレーボール五輪秘話第1巻 東洋の魔女伝説』ベースボール・マガジン社.
- ニチボー株式会社, 1966, 『ニチボー75年史』ニチボー株式会社.
- 日本バレーボール協会編, 1982, 『日本バレーボール協会五十年史——バレーボールの普及と発展の歩み』日本バレーボール協会.
- 奥野健男, 1964, 「大松監督における男の研究」『婦人公論』12月号: 116-121.
- 大崎企業スポーツ事業研究助成財団, 1997a, 『企業スポーツの在り方および運営方法に関する調査研究』財団法人 大崎企業スポーツ事業研究助成財団.
- , 1997b, 『企業スポーツとスポーツ・イベントに関わる調査・研究』財団法人 大崎企業スポーツ事業研究助成財団.
- , 1997c, 『企業スポーツにおける多目的体育施設の在り方および効果的な観客動員に関する調査・研究』財団法人 大崎企業スポーツ事業研究助成財団.
- , 1997d, 『企業スポーツにおけるキャリアパスの現状およびあり方に関する調査研究報告書』財団法人 大崎企業スポーツ事業研究助成財団.
- , 1998, 『企業スポーツの現状とあるべき姿——選手の処遇を軸に考える』財団法人 大崎企業スポーツ事業研究助成財団.
- , 1999, 『企業スポーツの社会的影響及び効果指標づくりに関する調査研究』財団法人 大崎企業スポーツ事業研究助成財団.
- 大崎企業スポーツ事業研究助成財団編, 1999, 『企業スポーツサミット・論文集』財団法人 大崎企業スポーツ事業研究助成財団.
- 坂上康博, 1998, 『権力装置としてのスポーツ——帝国日本の国家戦略』講談社.
- , 2001, 『日本史リブレット58 スポーツと政治』山川出版社.
- 左近充輝一, 2000, 「不況とともに崩壊 企業スポーツ(上)——トップレベルの177チームが撤退」『朝日総研レポート』145, 朝日新聞社総合研究センター, 4-29.
- 玉木正之, 1999, 『スポーツとは何か』講談社.



吉見俊哉, 1999, 「ナショナリズムとスポーツ」 井上俊・亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』世界思想社, 41-56.

(あらた まさふみ、東京大学大学院、arapyon@hotmail.com)

## Historical Sociology of Industrial Sport

Focusing on the Japanese Volleyball Team in Tokyo Olympic

ARATA, Masafumi

When we examine the development of sport in Japan, it is impossible to ignore industrial sport, which has been playing an important role throughout the post war era. In criticizing the theory of industrial sociology and sport sociology in previous studies, I suppose, instead of taking the concepts of company and sport for granted, to reinterpret industrial sport in the light of factory recreation.

This paper describes the process how the YMCA-invented volleyball transformed from bare recreation for mill-girls to a competitive sport between companies, until the eventual acquisition of Gold Medal in the 1964 Tokyo Olympic.

110061東京都千代田区  
綾瀬町1-5-5  
セリカビル

せりか書房

TEL: 03-5661-6666  
http://www.serika.co.jp

清水 諭 編

### オリンピック・スタディーズ

—複数の経験・複数の政治

古代ギリシアへの憧憬から生み出されたオリンピックは、人種やジェンダー、ナショナリティの構築、資本主義といった「政治的なもの」と関わり続けながら発展し、いまや(そしてつねに/すでに)危機的状況に陥っている。¥2625

北田 暁大 著

### 〈意味〉への抗い

—メディアエーションの文化政治学

マクルーハン、ベンヤミン、キットラー、ルーマンの再評価から「方法としてのメディア論」を模索するとともに、戦前期の日本映画からポップの歌詞にいたる具体例を通してメディアの不透明な「媒介作用」の実相に迫る。¥2625

伊藤 守 編

### 文化の実践、文化の研究

—増殖するカルチュラル・スタディーズ

都市の記憶と再編の政治学、政治的身体と権力、ハイブリッド・カルチャー、メディア・リアリティのアルケオロジーなどをテーマに現代文化=政治のアクチュアルな問題に果敢に取り組み、若手研究者15人の爆発的な成果。 ¥2520

櫻村 愛子

### 「心理学化する社会」の臨床社会学

▶ 社会の全ての成員が周辺化し、排除されてゆく現代社会の危機を読み解く 3800円

### ラカン派社会学入門

▶ 社会現象を精神分析的に解析する 2900円

藤田 英典

### 家族とジェンダー

● 教育と社会の構成原理 2600円

菅野 盾樹

### 新修辞学

● 反〈哲学的〉考察 3600円

矢野 智司・蔦野 克己 編

### 物語の臨界

● 「物語ること」の教育学 2800円

世織書房

〒240-0003 横浜市保土ヶ谷区天王町1-12-12  
tel 045-334-5554 (価格は税抜)